

幼年就学期部会 開催日：R1.5.20（月）

## 令和元年度 第 1 回 香南市人生支援計画 幼年就学期 部会報告書

(H30 年度の取組に対する評価と今後の取組の方向性)

## ◇ 部会委員 ◎部会長 ○副部会長

	役職	氏名	所属	出欠
1	◎	中脇 正人	野市小放課後子ども教室	出
2	○	武田 了子	夜須幼稚園 園長	出
3	◇	前田 真衣	香南市社会福祉協議会 職員	出
4	◇	竹倉 美智	主任児童委員	出
5	◇	中元 啓恵	香南市教育委員	欠
6	◇	武田 和也	香南市 PTA 連絡協議会 会長	欠
7	◇	山崎 和佳子	香我美おれんじ保育所 保護者	出
8	◇	山下 英雄	城山高校 校長	出
9	◇	藤川 尚司	香我美小学校 校長	出
10	◇	石井 真里奈	子育てサークル まざあぐらす	欠

## ◇事務局 ◎事務局長 ○副事務局長

	役職	氏名	課名	出欠
1	◎	前川 浩文	こども課	出
2	○	山本 昌伸	学校教育課	出
3	◇	山嶋 久代	こども課	出
4	◇	中屋 健一郎	〃	出
5	◇	近森 紳也	〃	出
6	◇	門脇 佐代子	学校教育課	出
7	◇	国松 士晃	生涯学習課	出
8	◇	山脇 智希	〃	出
9	◇	朝倉 ちさ	健康対策課	出
10	◇	山上 奈津美	市民保険課	出
11	◇	浜田 知佐	人権課	出
12	◇	松田 真由子	福祉事務所	出
13	総括	岡本 修	地域支援課	出
14	〃	久武 正和	〃	出

## ☆ 幼年就学期部会の開催内容

◎ 開会

◎ 自己紹介

◎ 議事内容

1. 平成 30 年度 第 2 回人生支援計画策定委員会の報告について

2. 平成 30 年度の取組について

◇ 『目標数値』に対する精査について【PDCA】

◇ 各事業の取組の精査

3. 令和元年度の部会テーマについて

◎ その他（年間スケジュールなど説明）

◎ 閉会

## 1. 平成30年度第2回人生支援計画策定委員会の報告について

○平成31年1月29日開催の策定委員会に出席した部会長から報告。(内容省略)

## 2. 平成30年度の実績について

以下に掲載する個別事業名は、各施策を実施するための課題等について、特に成果があったものや改善することが必要とされ、より深く議論されたものである。

### ◇ 『目標数値』に対する精査について【PDCA】

#### ① No.9 こうなんファミリーサポートセンター

##### 【P】(目標値)

◇H30年度数値目標：『おねがい会員・まかせて会員80人/延べ』

◇実績値：『おねがい会員・まかせて会員74人/延べ』

◇評価：『B』

##### 【D】(実行内容)

○子育て中の家庭を支援するため、子育ての援助をしてほしい会員(おねがい会員)と、子育ての応援ができる会員(まかせて会員)との相互援助活動を行うため会員登録の増加を図る。

○おねがい会員45人、まかせて会員28人、両方会員1人 活動回数168回

##### 【C】(チェック/確認)

●おねがい会員からの、「知らない人に1対1で見てもらうことに不安を感じる」「公民館などで大人数で見てもらいたい」という意見がある。

●社協のボランティアセンター運営委員会において、ボランティアをお願いしたい人、ボランティアをしたい人という2つのボランティアがいて、ある一定の場所で直接引き合わせることで、そのニーズがうまくいって、誰も入らずにスムーズにいったという話を聞いたので、ファミサポでもできたらいいと感じた。

##### 【A】(アクション/改善)

○社会福祉協議会と協働して、保護者や会員へのアンケート調査の実施や他市の状況を参考に会員増加につながる取組を進める。

## ② No.12 朝食摂取割合（3歳児）

### 【P】（目標値）

- ◇H30 年度数値目標：『摂食割合 98.0%/年』
- ◇実績値：『摂食割合 93.9%/年』
- ◇評価：『B』

### 【D】（実行内容）

- 保育所・幼稚園では、食べる楽しさや食べ物のおいしさを知り、生活リズムの基礎や正しい食習慣を身につけ、食を楽しむ心を育てるような事業を実施し、子育て支援センターでは、食育講演会や試食等を通じて食を楽しむ心を育てている。
- 家庭や保育所、幼稚園と連携した食育の取組み、食べることの楽しさや食への関心を高め、食を通じた体験などで食を楽しむ心を育てることの大切さを啓発する。また、幼児期からの望ましい生活習慣の改善に向け子どもの保護者向けに乳幼児健診等でのアドバイスを行っている。

### 【C】（チェック/確認）

- 「週のうち1～2回食べない3歳児の割合が5%」について、こういう子どもたちの家庭については把握しているのか。
- 3歳児からは小学生まで見ていないのか。

### 【A】（アクション/改善）

- 朝食摂取割合が昨年より低くなっている。週のうち1～2回食べない3歳児の割合が約5%あり、生活リズムを含めた更なる啓発を行う。保育所・幼稚園や子育て支援センターでの食育事業においても朝食について重点的に啓発する。
- 保育・幼稚園等と連携し食育事業を継続。乳幼児健診での指導継続。来年度開所する総合子育て支援センターにおいて栄養相談を実施する。
- 保育や幼稚園等在園児や保護者、地域の親子など乳幼児期から育児中の市民の方を対象に食育事業（親子クッキングや朝食レシピの配布等）を行っている。また、乳幼児健診では離乳食や幼児食の媒体を使って栄養士が栄養指導を行っており離乳食講習や栄養相談等で保護者を巻き込んだ指導を行っている。

## ③ No.22 地域こども見守り体制

### 【P】（目標値）

- ◇H30 年度数値目標：『地域学校協働本部設置数 7 校』
- ◇実績値：『地域学校協働本部設置数 7 校』
- ◇評価：『A』

#### 【D】（実行内容）

- 要保護児童対策地域協議会を設置し、代表者会議、実務者会議、地域支援者会議、個別ケース検討会議の4層構造により登録ケースについては関係機関と連携して総合的な対応を行った。
- OPTA や地域学校協働本部事業などで、保護者や地域の方とあいさつ運動や交通指導などに取り組むとともに、県のスクールガードリーダー活用事業でスクールガードリーダーの見守り活動を実施した。
- 青色回転灯パトロールによる登下校時の見守り活動を行った。

#### 【C】（チェック/確認）

- 評議員さんや高齢の方もいる中で継続が大変。また、個人や学校（校長先生）、行政などへの負荷が予想される中で、5年後、10年後のビジョンはあるのか。
- 現場の実態は、この事業の実施により業務が増える。学校の業務を代わりに地域が担うという事業ではない。地域の方は元々学校に関わってくれている。しかし本部立ち上げにより事務量は増えるため、全ての学校に本部設置等を強制するのではなく、従来通りでよいという選択肢もほしい。授業の拡大や土曜授業の活性化など、やればやるほど学校は追いつめられる。むしろそうではない仕組みを提起してほしいというのが現場の率直な意見。
- 不必要なところまで放課後子ども教室を作ろうとして、逆に大変なことになったこともある。負担を減らそうとした結果、増えているように感じることも。校長先生や学校とのコミュニケーションは重要。小学校と中学校の重複するところを一緒にしてシンプルな組織にしてはどうか。
- 少子化対策の中で、数値的な実績を上げていくことが本当に正しいのか、数値目標も割合か数のどちらが適切かなど気になる項目もある。事業内容についても回数を増やすのか中身の充実を図るのかなど、全体を通してKPIを見直す必要があるのではないか。例えば、事業の開催数と参加者数のどちらが良いか。5%という割合が実際は何人なのか。少しずつ年を追うごとにKPIなどに現れる数字の裏側も見ていければいいのではないか。

#### 【A】（アクション/改善）

- 地域学校協働本部事業を実施していない学校は、平成31年度からの実施に向け準備をする。
- 地域学校協働本部の活動を、子ども見守り体制に活かす。

#### ④ No.23、No.24 不登校と引きこもり児童の支援

##### 【P】(目標値)

	(No.23 小学校)	(No.24 中学校)
◇H30 年度数値目標	『0.8%/年』	『4.5%/年』
◇実績値	『発生率 0.62%/年』	『発生率 5.41%/年』
◇評価	『*』	『*』

##### 【D】(実行内容)

○家庭における児童療育の技術に関すること及び児童にかかわる家庭の人間関係に関すること、その他、家庭児童の福祉に関することの相談指導を行う。

##### 【C】(チェック/確認)

- 一旦不登校になるとその不登校は改善されず、また新しい不登校が発生するという傾向にあると考えていたが、新規の不登校の割合が減少したことについて、何か取組があったのか。  
→香我美中学校区において「魅力ある学校づくり調査研究事業」を実施。
- 岡山県総社市でも香我美中のような取組をして不登校が減少しているという話を教育委員会から聞いたことがある。同じような取組ができると香南市全体でも減ってくるのではないかと感じた。

##### 【A】(アクション/改善)

○香南市全ての小学校・中学校で「魅力ある学校づくり調査研究事業」を実施し、新規の不登校児童が出ないように未然防止に取り組む。  
SSW や SC を有効的に活用し、学校・家庭・関係機関の連携強化を図る。

#### ⑤ No.28、No.29 スポーツの推進 「児童生徒の肥満傾向率」

##### 【P】(目標値)

	(No.28 小学校)	(No.29 中学校)
◇H30 年度数値目標	『11.5%/年』	『9.5%/年』
◇実績値	『発生率 11.0%/年』	『発生率 11.6%/年』
◇評価	『*』	『*』

##### 【D】(実行内容)

○関係課と連携しながら、スポーツ教室及び各種スポーツ大会の開催やスポーツ少年団やサークルの活動支援を行い、基本的な生活習慣の確立や体育授業の改善など運動への興味関心を高める活動を推進する。

## 【C】(チェック/確認)

- 以前にも出た意見で、人数が学年によって違うので、数値化してもあまり意味がないのではないかと。5年生の時点だけでなく、同じ子どもで数字をおさえることはできないか。(今の5年生と来年の5年生ではなく、今の5年生と来年の6年生という形)
- 平成31年の中学2年生と平成28年の小学5年生を比べると同じ子どもなので、そうするとわかりやすい。
- 母集団が違うので、1割減という指標の立て方がどうなのかなという気がする。毎年全国平均以下を目指すということであれば可能かという気はする。

## 【A】(アクション/改善)

○生活習慣(早寝・早起き・朝ご飯)の確立を目指すことや、体育の授業内容を工夫し、日常生活の中に体を動かす機会を設ける。

## ◇ 各事業の取組の精査

### ① 就園援助費支給事業

- 対象者の「保護を必要とする状態にある者」というのをどう判断するのか。小中学校にも給食費の扶助制度があり、整合が気になった。
- 生保、非課税という線引きは非常にわかりやすいが、小中学校は別の基準を設けている部分もあると思う。保育・幼稚の時には非該当で、小中学校の時には該当するという状態はどうか。

### ② 総合子育て支援センター

- 「病気の回復期であり集団保育が困難」というのは、インフルエンザなどで熱が下がっても何日間か休まなければならない時でも行けるのか。
- どこまでが保育所に行けて、どこまでが病後児保育で診てもらえるのか、判断が難しい。
- 病弱の特別支援学校ではないのか。教育はしないのか。利用する期間は。
- 3室とあるが、具体的には1部屋何人利用できるのか。
- 感染症が終わって、学校へ行っていい状態になれば登校する、小学校6年生まで、というのはイメージが湧かない。その間、教育対応はどうなるのか、というのは課題になる。学校教育課と打ち合わせをしているのか。例えば長期入院後に急に学校に戻るには不安があるという猶予期間にとる場合であれば、教育的なことが入ってこないとあまり意味がなくなる。サポートが入ってからの学校というイメージになる。
- 県内に病弱の学校は非常に少ない。これが広がればいいが、教員免許が必要な先生の配置が必要。もっともっと使い勝手が良くなって、いろんなことに対応できるとすばらしいと思う。
- 利用案内は学校等へ配布するのか。
- 病児保育と勘違いする保護者の方がいると、せっかくできたのに不満の対象になりもったいない。どういう方を対象に作られたのかを明確にしたほうがいい。

### ③ 魅力ある学校づくり

- パンフレット「魅力ある学校づくり」の中の最終ページ、学校における取組（例）「関係機関（特別支援学校、医療等）との連携」について、具体的に始まっているのか。城山高校では、医療との連携について、昨年度から高知大学医学部附属病院の小児科の先生に年3回来ていただいて、保護者や生徒との面談を行っている。そういったことも含めて小中学校でやろうとしているのか。
- 不登校になる大きな要因の一つである本人の特性的な傾向、困り感を緩和するには、特別支援学校の教育相談を受けて特性を把握したり、保護者との連携の中で受診した医療機関と学校とが連携するということはすでに進めている。魅力ある学校づくりの一番のメインは集団指導であり、それを中心にした上で個別指導という発想。新規の不登校が減っていけば、全体が増加することはない。今までの子どもたちへの個別支援が減っていけば、なお減っていくであろうと。香我美中学校区では、幸い一定の成功をしている。

### 3. 令和元年度の部会テーマ

- ◇ 子どもたちが安心できる「居場所」づくり。
  - ◇ 困っている親や、問題を抱えている子ども達の「マイノリティ」に対する居場所の提供。
- 
- 全体を見ると、保護者にとっても子どもたちにとっても「居場所」を提供している。本当にいる居場所であったり、心の居場所であったり。きちんと居場所が提供できている、というイメージがあるので、そういう方向でもいいのかと思う。
  - 環境が変わることで、高校になってまた新しい目標を目指してやっていこうということが、城山高校でできたらと考えている。以前不登校だったからということを城山高校ではマイナスにとらえていない。特別支援学校ではない高校としてどういうことができるのか、小中高も含めて対応しなければならないと考えている。
  - 1クラス150人の留学生の中に、以前不登校であった日本人が2、3人いるが、1年生の時から全く普通にできている。大学デビューしてスタートからやり直して生き生きして生活しているので、そういう場は必要であると考えている。
  - 柱になるのは「居場所」とすれば、保護者さんの居場所づくりをテーマにしてもいいのかと考えている。
  - 困っている親や問題を抱えている子どもたちに共通しているのは「マイノリティ」の人たちではないか。周りから理解されなかったり、自分の気持ちが周りの人たちと違っている方たちをどう理解していくのかということで居場所を提供できないものか、そういう視点も今の社会に必要なのではないかと思う。
  - マイノリティの人たちの権利を守ることは大事。そこをケアできれば、いろんな問題が少しずつ解決していくのではないかと。新たな不登校を出さないという取組もいい取組であると思う。
  - 不登校になりかけた子ども達の一番安心できる場所は家庭。子ども達への対応で、その他の安心できる居場所も探していく。